



富山県造形教育連盟会報「糸」について  
 富山県造形教育連盟は、幼、小、中、高の先生方が参加する、県芸術文化協会に加盟の文化振興の任意団体です。造形活動で大切にしたい発達段階という縦のつながりを考えることができる研究組織です。各校種の研究団体の横糸と、県造連の縦糸により、造形教育という織物が美しくつくり出されることを願い、会報を「糸」発行しました。本連盟の会員限定ページにて公開します。

**作品の「わからない」という意味** 副会長 呉羽中学校 伊勢 威知郎

この夏、富山県美術館に大竹伸朗展を観に行きました。約20年ぶりの大回顧展で、作品のスケールや量に圧倒されました。展示方法は、テーマ別に分かれており、題名等のキャプションは一切掲示しないというユニークな内容でもありました。この展覧会を開催するにあたり、大竹氏はインタビューを受けていたのですが、次の言葉が印象に残りました。「なぜこのような作品をつくったか」という問いに「わからない」と答えることが許されるのは世の中で芸術だけだと思う」

県内の中学校では年1回（秋）、東西地区に分かれて研究大会が行われています。今年はコロナによる制約を一切設けず、先生方が授業の教室に全員入っての参観や全体の協議が行われました。ある授業の中で生徒が、なぜそのような作品をつくったのかという教師からの問いに、少し考えてから「わからない」と答えていました。そのとき私は大竹氏の言葉が頭をよぎりました。その後、授業担当の先生は「そうか」と生徒の制作の意図について上手に言葉をつなぎながら、他の生徒へ作者の思いを伝えておられました。

造形作品をつくるにあたり、主題や意図はたいへん重要であります。ただその一方で、その思いが深ければ深いほど、なかなか言葉に表すことは難しい場合があります。作品（表現）を言語化することに意味があるかどうかは別にして、子供たちが「わからない」ということを私たち教師がどれだけ（寛容に）享受できるかどうかで、その後の子供の作品づくりがより自由に、より豊かになっていくものと信じています。

**造形教材研究会での題材紹介**

「スチレン版画」

富山市立山室小学校 廣田 有希恵

スチレンボードは竹串等で簡単に彫ることができ、繰り返し刷ることのできるという点で扱いやすい素材です。また、表現方法が多様で、パズルのように切り分けてスタンプしたり、色を変え、版を回転させて刷ったり、クレヨン等の他画材と組み合わせたりと、多様な表現が生まれます。教材研究会の参加者の皆様にも、「次はこうしてみようかな」と時間いっぱい試行錯誤する面白さを味わっていただきました。題材の工夫とねらい次第で、幼稚園～高学年まで楽しく学べる版画です。



色を変えて刷ろうかな  
 模様を加えて刷ろうかな

**実践紹介「自由」という「不自由」～環境と鑑賞～**

高岡市立牧野小学校 教頭 坂井 政信

「自由に描いていいよ」「好きなようにつくって」などと言われ、思いのままに伸び伸びと表現する子供…。とても素敵な姿ですが、「思い浮かばない」「どう表せばよいのか分からない」子供たちにとって、「自由」という言葉は「不自由」で残酷です。その要因が何かは別として、「鑑賞」は、大きな手立ての一つと考えます。しかし、表現と鑑賞がどれほど密接で、実際にどのように具現化されているのかと問われると難しい面もあるのではないのでしょうか。

知識や経験が少ない子供たちには、表現するための武器となる術が少ないと言えます。もっとたくさんいろいろなものを見たり触れたり試したりする機会があれば、表現のための引き出しが豊かになり、もっと表現が広がったり深まったりするのでしょうか。

本校では、昨年度、体育館を美術館に見立て、全児童の作品を展示する「牧野小作品展覧会」を行いました。保護者の方にも見ていただきましたが、子供たちがもっと他の学年の様々な題材や表現に触れる機会があればよいという視点を大切にしました。また、本校の階段踊り場には、ロッカーのような展示用の棚があり、そこには各学年の作品等が随時飾られています。さらに、教員が中心に「今月の掲示」を工夫し掲示することで、子供たちが興味をもち、いろいろな表現に触れる機会となるように努めています。

子供たちの鑑賞の場である掲示が、学習参観や保護者会のための掲示であってはなりません。私たちにできることは、どのような「環境」が、子供たちの表現につながるのかを考え、整えることです。その際、どのように作品を見ればよいのかという「鑑賞の視点」を明らかにすることも大切です。

それぞれの子供たちにとって、「自由」という言葉が、よりワクワクするものになることを願っています。



**おすすめの読書紹介 『子どもの絵の見方』奥村 高明 著**

富山市立堀川小学校 横道 直

「ほめる」という指導は強力すぎるのだ。「上手だね」を連発すると、子どもの精神的な足かせをはめかねない。(P82より引用)

図画工作科の授業研究会にて必ずといっていいほど話題にあがるのが教師の言葉かけだと感じている。本著は、子供たちの取組をどう見取り、どう理解していくかを学んだ1冊である。

子供の描いた絵を見ながら、「ここは苦労したでしょう」「どんな順番でつくったの？」と楽しくおしゃべりする。「ここがうまくいったからうれしかったのだろうな」と、だんだんと子どもが感じたことを味わえるようになる。

子供のよさをほめるという意識も大事だが、子供のプロセスに共感しようと努めることの重要性を再認識することができた。図画工作科だけではなく、学校生活すべてに生かせるはずだ。実際の子供の作品を基に、具体的な事例を通して学ぶことができる1冊である。ぜひ、若い先生方にも読んでもらいたい。

**〈随想〉中学生のもつ力は無限大だ。**

富山市立月岡中学校 深本 志奈乃

集中して描いたときの生命力が宿った一本一本の線。どんどん湧き上がる自由な発想。なかなか思うように形にできず、試行錯誤を繰り返しているうちに、ある日突然覚醒する力。度々生徒たちのもつ力に驚かされる。大人にはなかなかない伸び代。うらやましい限りだ。そんな姿を見るのがこの上ない楽しみであり、中学校教員としてのやりがいを感じる瞬間である。そして、生徒たちのその無限大の力を少しでも多く引き出せるよう、こちらも日々工夫が必要だ。